

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

|            |   |
|------------|---|
| Title      | 『新編醉翁談録』の成書に関する一考察（二）：その編纂意図をめぐって   |
| Author(s)  | 孟, 夏  |
| Citation   | 中國中世文學研究 , 73 : 73 - 87   |
| Issue Date | 2020-03-25  |
| DOI        |   |
| Self DOI   |   |
| URL        | <a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049265">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049265</a> |
| Right      |   |
| Relation   |   |



## 『新編醉翁談録』の成書に関する一考察(二)

—その編纂意図をめぐって—

孟 夏

はじめに

筆者は、前稿『新編醉翁談録』の成書に関する一考察(一)——その編纂過程をめぐって——(『表現技術研究』第一五号、二〇二〇年)において、『新編醉翁談録』(以下『醉翁談録』とする)が編纂された際、編者羅燁が当時流布していた『異聞集』、『伝奇』、『蒙求』、『太平広記』、あるいは『靈怪集』、『麗情集』などの書物を利用していった可能性を指摘した。さらに、羅燁は一つの話に対して一つの書物だけからそのまま文章を引くのではなく、複数の書物に基づきながら文字を補い、より完成度の高い話を復元しようとしていたことを指摘し、また基本的には自身での改作は行わなかったようであるが、一部に白話的な表現が用いられている箇所や、わかりやすい表現に改められた箇所が見られることを指摘した。

筆者はかつて、『廬陵羅燁』という編者に関する情報や、

「醉翁」、「談録」という書名に着目して調査を行い、『醉翁談録』は、文人であった羅燁が、廬陵地方の文化環境の影響を受け、文人たちの宴席の場で語られた話を記録したものであると結論づけた。『人名+談録』と名付けられる書物をすべて調査したところ、そのほとんどが特定の人物の語った、前代あるいは当時の逸文や、その人物のコメントを記録するものだったのである。『醉翁談録』もこうした「談録」作品群の中に位置づけて考えるべきであろう<sup>1)</sup>。

しかし『人名+談録』は、主にある人物が語った話を記録するものであるため、既存の書物に基づいて記述を補充したり、表現を白話的に変えるなどの工夫は施す必要がないように思われる。ところが上述したように、『醉翁談録』の編者羅燁は、単に文人たちの談論を記録するだけではなく、そこで語られた話を、既存の書物のなかから探しだし、より詳細に記録すると同時に、時折表現も

変えており、他の「談録」作品とはいささか事情が異なる面もある。それでは、羅燁は何のためにこのような書物を編纂したのか、つまりその編纂意図はどのようなものであったのかが問題として残る。

そこで本稿では、当時の文人の談論活動の状況について考察を行い、また「談録」作品を中心とした文人の談論と関係がある書物の編纂方法、およびそれらの書物の編纂意図を検討することによって、羅燁がどのような意図で『醉翁談録』という書物を編纂したのかについて検討したい。

### 一 当時の文人たちの談論活動について

上述したように、『醉翁談録』は、他の「談録」作品同様、基本的には宴席の場などで語られた話を編者が記録したものだと考えられるため、その編纂意図に関する問題は、当時の宴席の場で談論された話がどのような形で語られたのかということと関係があると考えられる<sup>2)</sup>。したがって以下に、文人たち、主に『醉翁談録』と同時代の文人たちが宴席の場で話をどのように談論したのかといった問題を検討したい。

宴席の場での談論の様子に関する記載は、北宋の趙令時によって書かれた『侯鯖録』の巻五「元微之崔鶯鶯商調蝶恋花詞」(以下「蝶恋花詞」とする)に見られる。

夫「伝奇」者、唐元微之所述也。……至今士大夫極

談幽玄、訪奇述異、無不舉此以為美話、至於娼優女子、皆能調說大略。惜乎不被之以音律、故不能播之聲樂、形之管弦。好事君子極飲肆飲之際、願欲一聽其說、或舉其末而忘其本、或紀其略而不及終其篇、此吾曹之所共恨者也。今於暇日詳觀其文、略其煩褻、分之為十章。每章之下、屬之以詞、或全摭其文、或止取其意。又別為一曲、載之伝前、先叙前篇之意、調曰「商調」、曲名「蝶恋花」。

「伝奇」というものは、唐の元微之によって書きしるされたものである。……今に至るまで士大夫たちが心のおもむくままに奥深い道理を話し、奇事を探し述べる場合、この話を取り挙げて美談としない者はなかったのだ。妓女たちに至るまで、みなこの話のあらずじを述べることができた。しかし残念なことこの話は音楽を伴わないので、歌ったり、楽器で演奏することによって広範囲に伝えることができなかつた。物好きな人たちは、宴席で楽しみが極まると、この話を聞きたかつたが、あるときはその結末だけが語られて冒頭の部分は忘れられ、あるときはその大略は覚えられていても全篇には及ばず、私たちは皆残念に思つた。そこで暇な時にこの文章を詳細に読んで、繁雑な箇所を削除し、十章に分けた。各章の末尾に、詞を加えることによって、あるときはその一節の文章をまとめ、あるときはその一節の趣旨を述べた。また別に一つの曲を作り、正文の前

に置き、その前篇の趣旨を述べるが、その曲調は「商調」といい、曲名は「蝶恋花」という。

唐の元稹によって作られた鶯鶯の話は士大夫たちに好まれ、よく談論された<sup>3)</sup>。宴席の場ではこの話の詳細を聞きたくても、誰も冒頭から結末までのすべての部分を通して語ることができないため、趙令時はずっと残念に思っていた。そこで、趙令時は暇な時にこの話をよく読み、改めて整理して十章に分けたという。つまり、鶯鶯の話は当時流行していたものの、その詳細が談論の場や宴席の場で語られることはほとんどなかったため、趙令時は改めてこの話の原文に基づき、宴席で聞くことのできなかった部分を補充し、煩わしい箇所を削除し、歌える詞を増やし、全体的に整った話として記録したのである。

また、明の徐元の「八義記」の中にも、講釈師が紉王と姐己の話を語る様子についての詳細な記述が見られる。この記述からも同様に、宴席においては話の内容をすべて語るのではなく、話の筋だけが語られていたことがわかる<sup>4)</sup>。

何故すべて詳細に語られることが少なかったのかについては、例えば唐代には李亜仙の話を語ることに關する以下のような記載が見られる。唐の元稹の『元氏長慶集』卷十「酬翰林白学士代書一百韻」の中には、「翰墨題名尺、光陰聽話移（翰墨 名を題して尽き、光陰 話を聴きて移

す）」という一句が見られ、その注には、

又嘗於新昌宅説一枝花話、自寅至巳、猶未畢詞也。また私の新昌の宅で一枝花の話が語られたことがあったが、寅の刻（午前三〜五時）から巳の刻（午前九〜十一時）までかかっても話し終わらなかった。

とある。この「一枝花」というのはすなわち李亜仙の話である<sup>5)</sup>。李亜仙の話は何時間もかけて語られたが、それでもまだ終わらないほど時間がかかるものであったという。

さらに、文人が宴席などの場で議論を行う状況を考察してみると、その話を詳細に語ることもよりも、話に關する詩や詞を作ることの方が重視されていたようである。例えば南宋の劉克莊の『後村詩話』卷二には、

范石湖座上客有談劉婕妤事者、公与客約賦詞、游次公先成、公不復作、衆亦斂手。游詞云、「暖靄烘晴籟、鎖垂楊、籠池罩閣、万糸千縷。池上曙光分宿霧、日近群芳易吐。尋並蒂、欄邊凝佇。不信釵頭双鳳去、奈宝刀、被妾先留住。天一笑、万花妬。……」

范石湖（范成大）が開いた宴席の場で劉婕妤の故事を語る客がいて、范成大はその客と詞を作ることとを約束したが、游次公が先に作り終わったので、范成大は（その詞を見て）新たに同じ題材の詞を作るこ

とをやめてしまい、宴席の他の客も作ることをやめてしまった。游次公の詞は以下のものである。「暖かき靄 晴籟を烘し、垂楊を鎖ざし、池を籠め閣を罩め、万糸千縷たり。池上の曙光 宿霧を分ち、日近 群芳 吐き易し。並蒂を尋ねて、欄邊に凝佇す。釵頭の双鳳の去るを信ぜざるも、奈せん宝刀の、妾に先に留住せらるるを。天一たび笑へば、万花妬む。……」

という記載が見られる。「劉婕妤事（劉婕妤の故事）」とは、宋の哲宗が劉婕妤を寵愛し、孟皇后を冷遇して皇后の地位を剝奪したという故事を指す。この記述からは、范成大と客人が宴席の場でこの故事を詳細に語るより、むしろ故事を巡って詞を作ろうとしたことがわかる。また、宴席以外の場で様々な故事に關して議論がなされたという記述も見られる。南宋の儲泳『祛疑説』には以下のように述べられている。

有客拳倩女離魂話、因及張紫陽与雪竇禪師入定事。謂「雪竇以禪定成至陰之爽、故不能持物而還、紫陽以金丹凝至陽之神、故能持果而返。此事之有無不必深弁、大概先輩以此別性宗与形神俱妙之功用不同耳。」因語客曰、「陽神能運物、陰神不能運、固也。今山魃物精邪鬼而已、飛瓦走石、運致宝貨、瞬息千里。謂之陽神、可乎。」客不能對。

ある客が倩女離魂の話に触れたので、張紫陽と雪竇禪師が入定したことに及んだ。（客は）「雪竇禪師は禪定をもって最も盛んな陰神を形成するため、物を持って返ることができませんでしたが、紫陽は金丹をもって最も盛んな陽神を形成するため、果を持って返ることができました。このことの真偽を深く論じる必要はありません。おそらく先人はこのことをもって仏教の性宗と道教の形神俱妙の用が違うことをたとえたのでしょうか」と言った。そこで私は客に言った。「陽神は物を運ぶことができますが、陰神は物を運ぶことができないというのは、人の先入観です。いま山魃、物精、邪鬼のようなとんでもないものは、瓦や石を空に飛ばせ、荷物や宝物を運んで（手元にもたらし、あつという間に千里も離れた場所に移動させることができます。これらのものは陽神と呼ばばいいでしょうか。」客は答えられなかった。

ここでは、客が「倩女離魂」の話を挙げて陰陽に關する道理を説明したのに対し、儲泳が意見を加えるという記述が見られる<sup>6)</sup>。ここから、文人たちが談論を行う場合、話そのものを詳しく語ることもよりも、この話から何が見えるか、つまり話に対する討論を行うことのほうをより重視していたことが窺える。

以上、「蝶恋花詞」に見られる記述や、宴席で行われた講釈活動の状況に關する描写、一つの話を完全に語るの

にかかる時間、および文人たちが話そのものよりもそれに伴う議論や作詞をより重視したことを考え合わせると、文人たちが宴席などの場で語る場合、時には話の一部やあらずじが談論され、時には話をまとめた詩などが詠じられたが、故事そのものが詳細に語られることは少なかつたのではないかと推測できる。

## 二 談論活動に関する作品の特徴

では『酔翁談録』と同じ系統にある「談録」作品、つまり談論と関係がある書物には具体的にどのような特徴が見られるのであろうか。まず書名に「談録」の文字が付けられる書物の内容面の特徴を見てみたい。ここでは、唐の李綽『尚書故実（談録）』の例を挙げる。

武后朝宰相石泉公王方慶、琅琊王也。武后嘗御武成殿閱書画、問方慶曰、「卿家旧法書存乎。」方慶遂集自右軍已下至僧虔、智永禪師等二十五人、備書一卷進上。後命崔融作序、謂為『宝章集』、亦曰『王氏世宝』也。

武后の頃の宰相、石泉公王方慶は、琅琊王である。

武后はかつて武成殿に行つて書画を見て、方慶に尋ねた。「そなたの家には昔の書法の書籍があるか。」そこで方慶は右軍（王羲之）以降、僧虔、智永禪師までの二十五人の書法を集めて一巻の書物にして献上した。その後、武后は崔融に命を下して序を作ら

せ、この書を『宝章集』と名付けたが、またの名を『王氏世宝』ともいう。

この話については、同時代の他の書物の中にも見られる。例えば唐の韋瓘によつて編纂された『墨藪』「貞観論第十八」には、

神功元年五月、上謂鳳閣侍郎王方慶曰、「卿家多書、合有右軍遺跡。」方慶奏曰、「臣十代從祖伯義之書、先有四十余紙。貞観十二年、太宗購求、先臣並已進訖。唯有一卷見在、今臣進訖。臣十一代祖導、十代祖洽、九代祖珣、八代祖曇首、七代祖僧綽、六代祖仲瑩、五代祖騫、高祖規、曾祖褒、並九代三從伯祖晋中書令猷之已下二十八人、書共十卷、並造進。」上御武成殿、示群臣、仍令中書舍人崔融為『宝章集』以叙其事、復以集賜方慶。當時奉朝為榮。

神功元（六九七）年五月、皇帝（武則天）は鳳閣侍郎王方慶に言った。「そなたの家には藏書が多いので、当然右軍（王羲之）が残した書道作品を持っているはずであろう。」方慶は申し上げた。「わたしから十代遡つた傍系の祖伯義之の作品は、以前四十枚以上所有しておりまして。貞観十二（六三八）年、太宗（李世民）が購入しようとしてされたので、わたしの父はそれらをすべて献上いたしました。ただ一巻のみ残されましたが、いま献上いたします。わたし

の十一代前の祖先王導、十代前の祖先王洽、九代前の祖先王珣、八代前の祖先王曇首、七代前の祖先王僧綽、六代前の祖先王仲瑩、五代前の祖先王騫、高祖王規、曾祖王褒、並びに九代前の傍系の伯祖、晋の中書令王猷之以降の二十八人の書道作品は、合わせて十卷あり、それらも編集して一緒に献上します。」皇帝は武成殿に行つて、これを臣下たちに見せ、中書舍人崔融に命を下して『宝章集』のために序を書かせてこのことを述べさせると、また『宝章集』を王方慶に与えた。当時の朝臣たちは王方慶のために榮譽なことだと思つた。

とある。『尚書故実（談録）』の内容は、『墨藪』に比べるとかなり簡略である。また『尚書故実（談録）』の中には、『書断』の中の一句を引用する内容が見られることから、この書は話を記録する場合、話の最初から最後まですべてを記録するのではなく、話の一部分もしくはあらずじを記録する傾向があるようである。同様に、北宋の王闢之『澠水燕談録』の中にもこのような傾向が見られる。例えば巻四「忠孝」には以下のようにある。

（曹修古）暴疾、終於官。家貧、死之日、無衣以殮。郡之僚属、若吏民之賢者、莫不号慕嘆息、相与出錢帛数十万贖其家。曹女始笄、泣語其母曰、「先人忠節名聞天下、不幸以直言論死。且『君子不家于喪』、

安可受、以浼我先人之全德哉」哭不已、謝而遣之。吏民固乞、卒不受一錢。其純孝高識如此。

（曹修古）は急に病氣になり、興化軍の長官として任官中に亡くなった。曹修古の家は貧しく、亡くなった日に、着せるべき死者の装束はなかった。郡の同僚、あるいは官吏と庶民の中の德行に優れた人々は、父母が死んだときのように大声で泣き慕つたため息をつき、金品を数十万出し合い曹家に贈つて葬儀の費用を援助しようとした。曹修古の娘は成人したばかりであつたが、泣きながら母親に言った。「父上の忠義を堅く守る名声は天下に知れ渡っています。が、不幸にも直言のため左遷されて亡くなりました。しかも『君子は葬式を行つて家の得にはしない』と言われます。どうしてこれらの金品を受け、父上の完全なる德行を汚せましょうか。」そう言つて泣きやむことができず、辞謝して人々を送り出した。人々は受け取つてもらおうと重ね重ね説得したが、結局一錢も受け取らなかつた。曹修古の娘はこのように孝行が篤く、高い見識をもつていた。

この話は、『酔翁談録』庚集巻一「閨房賢淑」の中にも見られる。

（曹修古）期年而卒。曹氏未嫁、父既没、其故僚卒吏民三十万致之柩前曰、「以供窆喪。」母陳氏将受之。

女曰、「制家之用、惟其家之斟酌。初吾父入朝廷、出蒞民政、約以奉身、廉於臨人。今其去矣、葬禮隨家豐儉、苟將受所餽贈、惟它人忍之、我弗忍也。」母因是而請辭焉。其故僚復謂之曰、「葬先公弗資是財、則聞命矣、願留異日嫁公女焉、可毋拒也。」女曰、「俾用於喪、尚不敢取、今欲備吾之嫁、是使妾幸父之喪而自醜也。人之聞之、謂如何哉。」

(曹修古は左遷された)一年後になくなった。曹氏はまだ嫁がず家にいたが、父が亡くなった後、その同僚や部下と庶民が集まって三十万を曹修古の棺の前に送り届けて言った。「これを葬儀費用として使ってください。」曹氏の母陳氏はこれを受け取ろうとした。娘は言った。「家を切り盛りするためにかかった費用は、もっぱらその家のいろいろな事情を考慮して決められるものです。当初わたしの父が朝廷に入って中央の官吏として働いていた頃、あるいは地方に出て民政を司っていた頃は、身をひきしめて忠実に職務を果たし、公正に人材を選抜しました。父が亡くなった今、葬儀は家の貧富に応じて行うべきで、他人の贈りものを受けようとすれば、他の人がこれを黙認しても、わたしには我慢できません。」そこで母は贈りものを辞謝した。曹修古の同僚はまた言った。「曹公の葬儀をするためにこの財物を辞退されることは、あなたの意見に従いますが、これを受け取って後日に曹公の娘さんの嫁入りの費用として使っ

てくださいるようお願いしします。どうか断らないでください。」娘は言った。「葬儀のために使うのであっても受け取ることはできないのに、今これをわたしの嫁入りの支度金として受け取るなど、父の葬儀の恩恵を受けるようで恥ずかしく思われます。世間の人がこのことを聞けば、どのように思うでしょうか。」

この話について、『澠水燕談録』では「忠孝」の小標題の下に置かれ、『醉翁談録』では「閨房賢淑」の小標題の下に置かれることから、この両書ではいずれも曹修古の娘の品行を褒めるものであることがわかる。しかし両書所収の話を比べると、『醉翁談録』の方は曹修古の娘に関する描写や会話をより多く記録し、彼女の人物像をはっきり描き出しているのに対し、『澠水燕談録』の方は簡単に話の概要を記録し、人物に関する詳しい描写は見られない。

以上の比較によって、「談録」群の多くは簡単に話の概要を記録したものであることがわかる。

こうした「談録」作品以外にも、談論のネタを提供するという意図のもとに作られた書物がある。次に、これらの書物の内容の特徴を見てみたい。例えば南宋の曾慥によって編纂された『類説』の自序には、

小道可觀、聖人之訓也。余喬寓銀峰、居多暇日、因集百家之説、採摭事實、編纂成書、分五十卷、名曰

『類説』。可以資治体、助名教、供談笑、広見聞。如嗜常珍、不廢異饌下筋之処、水陸具陳矣。覽者其詳挾矣。紹興六年四月望日温陵曾慥引。

小さい道にも見るべきものがあるというのは、聖人の教えである。わたしは銀峰に住んで、常に暇であるため、百家の説を集め、事実を選び取り、書物を編纂し、五十巻に分けて『類説』と名付けた。この書は、国の法令制度に資すところがあり、名分を正して秩序を保とうとする儒教に貢献し、談笑のネタを提供し、読者に見聞を広めさせることができる。

それはあたかもふだんの食事のようであるが、珍しい部分やすじの箇所も捨てることはせず、山海のあらゆるものがそろうようなものである。読者は(自分が読みたい内容を)よく選んで読んでください。紹興六年四月望日(一一三六年四月十五日)に温陵

(現在福建省泉州市)の曾慥が序を記す。

とある。ここに「供談笑(談笑のネタを提供する)」の文字が見られることから、曾慥は『類説』を編纂する際、収録した話を談論の材料として提供するという意図を持っているといえる。では実際に『類説』の内容はどのような特徴を持っているのか。まず『類説』に関する『四庫全書総目提要』の記載を見てみたい。

其書体例、略倣馬総『意林』、每一書乃刪削原文、而

取其奇麗之語、仍存原目於条首……又每書雖經節録、其存於今者、以原本相校、未嘗改竄一詞。その書(『類説』)の構成は、だいたいにおいて馬総の『意林』を模倣し、収録した各書物はいずれも原文の内容を簡略化し、表現が美しい箇所を取り上げるが、原書の小標題をそのまま残して、各条の冒頭に置き……また各書の内容を簡略化するが、現存する条目の文字と、原書の文字を比べると、一文字さえ改作していない。

この記述から、編者曾慥は、選択した話に対して簡略化を行なうという方法で(しかも文字を改めることはせずに)編纂したことがわかる。実際に『類説』所収の話を見てみると、曾慥は書物を編纂する際、参照した書物の文字を簡略化したことが確認できる<sup>9)</sup>。

しかし一方で、談論活動に関する作品がすべてこのように簡略化した形で記録されたとは限らない。例えば上述したように、宴席の場で語られた鶯鶯の話について、趙令時は話を整えて完全なものにし、詞を増やすなどのさまざまな工夫を施し、「蝶恋花詞」を作った。また、南宋の洪邁の『夷堅志』支乙卷四「再書徐大夫誤」には以下のような記述が見られる。

偶閱王彦輔『塵史』、其末紀乖繆二事。其一曰、「京西憲按行至一邑、辱県尉張伯豪。斥使不騎而歩、且

行且教其所為。既入伝舎、有白直虞侯者、檢點人也。前白曰、『提刑適罵者官員乃五』<sup>10</sup>陶中丞女婿。』憲豐然曰、『何不早告我。』……」其二曰、「……憲乃曰、『護戎』雖年高、顧精神不減、不知服何藥。』……」此兩者全与徐大夫相似。信知監司上官、輕薄郡県僚吏、卒貽譏誚、從昔有之。故備載其語、以資好事者談助。

たまたま王彦輔の『塵史』を読んで、この書の最後の部分に二つの道理に合わない話が記されているのを見た。その一は以下のようなものである。京西路（現在河南省洛陽市一帯）の長官が地方を視察してある村に着き、その地方を管理する県尉張伯豪に恥をかかせた。長官は張伯豪を馬を乗せずに歩かせ、長官は進みながら張伯豪の行為を責めた。宿屋に入ったところ、ある悪賢い小役人がいた。彼は長官に申し上げた。「長官がさきほど罵った官員は陶中丞の女婿です。」長官は驚いて言った。「なぜ早く教えてくれなかったのか。』……その二は以下のようなものである。……そこでその長官は言った。「護戎（軍務を監察する官吏）は年寄りだが、よく見ると気力は衰えていないことがわかる。護戎は何らかの薬を飲んだのであるか。』……」この二つの話は徐大夫の話と全く同じである。地方の官吏を監察する高官は、地方の官吏をばかにしたが、結局笑いのたねにされたという話は、確かに昔から存在していることがわかった。それで

ものが見られる一方、白話的な表現や人物の対話などの表現を増やして、描写を詳しくするように工夫したのも見られ、その方向性は一律ではない。こうした違いは、それぞれの編者の意図の違いによるものだと考えられる。以下に、各書物の自序や関連する記載を検討し、編纂意図の異なる点を考えてみる。

まず『談録』作品を見てみよう。例えば『尚書故実（談録）』の自序には、

……叨遂迎塵、每容侍話。凡聆徵引、必異尋常。足  
広後生、可貽好事。遂纂集尤異者、兼雜以詼諧十數  
節、作『尚書故実』云耳。

（張尚書のもとを）訪ねるとあたたかく迎えてもらい、いつもそばで話をさせてもらうことができた。張尚書が引く典故は、いずれも普通のものとは異なっていた。後の人々に伝えるに値し、珍しいものを好む人々に残すべきである。そこでとりわけ珍しいものを集め、また笑話十數話を織り交せて、『尚書故実』を編纂したというわけである。

とある。編者李綽は、張尚書が話したものは普通の話と異なっており、世間に伝える価値があると思つたので、その中のとりわけ珍しいものを取り上げて記録したという。ここから、李綽はおそらく張尚書の言論を忠実に記録し、語られた内容に手を加えた箇所は多くないものと

ここでこれらの話を詳細に記し、珍しいものを好む人々の談話の材料として提供する。

「故備載其語、以資好事者談助（それでここでこれらの話を詳細に記し、珍しいものを好む人々の談話の材料として提供する）」という記述からは、人々に談話のネタを提供するという意図もあつて、洪邁が北宋の王得臣『塵史』所収の話を記録したことがわかる<sup>11</sup>。しかし『塵史』を確認してみると、太字で示した文字は、『塵史』ではそれぞれ「虞侯白提刑、適罵者是中丞婿。憲豐然曰、『何不早道』」、「不知何餌」となっている。両書の文字を比べると、『夷堅志』には人物像に関する描写（「有白直虞侯者、檢點人也」）が増え、人物のセリフ（「前白曰、『提刑適罵者官員乃五陶中丞女婿』」）が増えたほか、表現がわかりやすくなった箇所（「何不早告我」「不知服何藥」）も確認できる。つまり『夷堅志』の描写は、『塵史』より詳細で、表現を白話的にするなどの工夫が施されているのである。ではなぜこうした違いが見られるのだろうか。

### 三 編者の編纂意図について

上述のように、本稿で取り上げた書物はいずれも文人の談話活動と関わる書物であるため、談論の場で語られた話を記録し、あるいは談論のネタを提供できる話を記録するという意図が見られる。しかしこれらの書物の内容を詳細に見ていくと、内容を簡略化する作業を施した

推測できる。前述のように、実際に文人が談論を行う場合、話を詳細に語るのではなく、簡略化したものを語っていたと考えられるからである。

次に、『類説』の自序を見てみたい。

小道可觀、聖人之訓也。余奮寓銀峰、居多暇日、因  
集百家之說、採摭事實、編纂成書、分五十卷、名曰  
『類説』。可以資治體、助名教、供談笑、広見聞。如  
嗜常珍、不廢異饌下筋之処、水陸具陳矣。覽者其詳  
挾矣。紹興六年四月望日温陵曾慥引。  
（日本語訳既出。）

この中に、「供談笑（談笑のネタを提供する）」という言葉が見られるが、「供談笑」以外に、「資治体（国の法令制度に資するところがある）」、「助名教（名分を正して秩序を保とうとする儒教に貢献する）」、「広見聞（読者に見聞を広めさせる）」との文言も見られる。おそらく曾慥はこの書物を編纂する際、百家の説や事実を取り上げ、ある基準にしたがって分類し、具体的に何のために編纂するかを限定せず、多くの用途に使われ得る書物を編纂しようという意図があつたのではないだろうか。また、序の中に「覽者其詳挾矣（読者は（自分が読みたい内容を）よく選んで読んでほしい）」という言葉が見られることから、この書のどの部分を読むのか、何のために読むのかということ、読者自身が決める、つまりこの書の

類書としての機能を強調していると考えられる。

『尚書故実(談録)』あるいは『類説』のような書物は、ある人物の言論を記録して残すという意図、あるいは検索に便利な類書を作成するという意図が見られる。これらの書物は所収の話に対して工夫をこらしたり、描写を増やしたりする必要はない。

一方で、「蝶恋花詞」や『夷堅志』は、その編纂意図が異なっている。例えば上の「蝶恋花詞」は趙令時によって編纂された『侯鯖録』の中に収録されるが、『侯鯖録』がどのような書物かといえ、明の頓鋭による『侯鯖録』序」に以下のようにある。

聊復翁趙德麟、名令時、為前宋宗室安定郡王、以才美見喜於蘇文忠公。嘗取諸儒先佳詩緒論逸事、与夫書伝中及人所嘗談隱語、奇字、世共聞見而未知出処者、冥搜遠證、著之為書、名曰『侯鯖録』、意亦以書之味比鯖也。

聊復翁趙德麟、名は令時、北宋の皇族の安定郡王であり、文才が優れているため蘇文忠公(蘇軾)に認められた。趙令時はかつて学者たちの優れた詩作、言論、逸事や、典籍に載せられ、あるいは人々に語られた謎語や古文字、および世の中に知られるがその出典がわからないものを集め、編纂して書となし、『侯鯖録』と名付けた。(この書名の)意味はこの書の面白さは鯖のおいしさに匹敵するというものである。

鼓子詞を作り、友人の何東白先生に見せた。先生は言った。「文章は美しいのですが、意はまた尽くされていません。作品の末尾にも一章加え、張と崔は人倫のために契りを結ぶことができず、またその感情は社会規範に合わないので、当初は意気投合して深い感情で結ばれたものの、結局別れることになったのは、事を急ぎ過ぎたからだといきさつを詳細に述べたらどうですか。そこまで言及すれば、完璧でしょう。」わたしは答えた。「先生は真の文筆家です。文章は必ず始めから終わりまで完全なものであり、内容に戒めを持たせて終わらせて欲しいということですね……」

とある。趙令時は「蝶恋花詞」という作品が完成すると、まず友人である何東白に読ませた。何東白は「文則美矣(文章は美しい)」という文学的な評価を下したものの、この話をさらに完全なものにすべきだという意見を出した。そこで趙令時は何東白を「真為文者也(真の文筆家である)」と褒めた。つまり趙令時と何東白は、この作品を巡って、表現が美しいかどうか、完全な文章と言えるかどうかについて討論を展開したのである。以上のことから、趙令時が「蝶恋花詞」を作ったのは、談論の場では聞けない完全な話を作りたかった上に、その話に文学的な表現を加え、読者に味わってもらおうことができる作品にしたかったからではないだろうかと思えることができる。

る。

「侯鯖」という言葉は、『西京雜記』巻二に見られる「五侯不相能、賓客不得来往。婁護豊弁、伝食五侯間、各得其權心、競致奇膳。護乃合以為鯖、世称五侯鯖、以為奇味焉。(五人の諸侯(王譚、王根、王立、王商、王逢五人をさす)は仲がよくないため、それぞれの食客がつき合うことを許さなかった。婁護は能弁であるため、次々と五人の諸侯の食客になり、それぞれの歡心を得た。五人の諸侯は先を争って婁護に珍しい料理を与えた。婁護はこの五家の料理を合せて鯖という料理を作り出し、世人はこれを五侯鯖と呼んで珍味とした)」という話を典故とする。書名と序の内容を考え合わせると、趙令時が文人の逸事や、出典がよくわからない故事を取り上げ、その出典を考証することによって、「五侯鯖」のような、読者に深く味わってもらおう書物を編纂したことがわかる。さらに、「蝶恋花詞」の末尾には、

僕嘗採摭其意、撰成鼓子詞十一章、示余友何東白先生。先生曰、「文則美矣、意猶有不尽者。胡不復為一章於其後、具道張之与崔既不能以理定其情、又不能合之於義、始相遇也、如是之篤、終相失也、如是之遽。必及於此、則完矣。」余応之曰、「先生真為文者也。言必欲有終始箴戒而後已。……」

私はかつて「鶯鶯伝」の大意を取り上げ、十一章の

きる。

同様に、「談論のネタを提供できる」話が見られる『夷堅志』にも類似する編纂意図が見られる。例えば南宋の張端義『貴耳集』巻上に、

憲聖在南内、愛神怪幻誕等書。郭象『睽車志』始出、洪景盧『夷堅志』繼之。  
憲聖(憲聖慈烈皇后)は皇帝の寢殿にいる際には、神異奇怪な題材の書物を好んだ。そこでまず郭象が『睽車志』を編纂して出版し、次に洪景盧が『夷堅志』を編纂して出版した。

とある。ここから、洪邁は鬼神の話を好む憲聖慈烈皇后の好みにあわせて『夷堅志』を編纂したことがわかる。つまり『夷堅志』は、誰かの話を単に記録したり談論のネタを提供するというより、話そのもののおもしろさによって読者の興味を惹かなければならない。実際『夷堅志』は、当時たいへんな人気を博して世に広まったようである。例えば『夷堅志』乙志自序には、

『夷堅』初成、士大夫或伝之、今鏤板於閩、於蜀、於婺、於臨安、蓋家有其書……於是五年間、又得卷帙多寡与前編等、乃以乙志名之。

最初『夷堅志』の甲志ができた時に、士大夫は皆それを伝え広めた。今は版木に彫られて、閩(現在の

福建省)、蜀(現在の四川省)、婺(現在の浙江省金华市)、臨安(現在の浙江省杭州市)などの地で印刷され、大抵の家にはその本がある……そこで五年の間に、さらに甲志と相当する分量の話を得て(編纂して)、乙志と名付けた。

とある。『夷堅志』甲志が完成した後、多くの地方で印刷され、世に広まっていたという。つまり洪邁は続く『夷堅志』乙志を編纂する際、『夷堅志』が皇帝に読まれるのみならず、士大夫たちの間にも伝わり、さらに複数の地方で出版され、大抵の家がこの書があることを知って、読者層の広がりを意識したものと思われる。洪邁が人物像に関する描写を増やしたり、白話的なわかりやすい表現を取り入れたりしたのは、話の面白さに磨きをかけ、より広い読者層に訴えるための工夫であると考えられるのである。

以上のことを考え合わせると、『醉翁談録』は、その書名から窺えるように、他の「談録」作品同様、基本的にはある人物が談論の場で語った、あるいはコメントしたものを収録した書物であると言えるが、その描写は他の「談録」作品とはいささか異なっており、複数の書物に基づいてより完成度の高い話を復元している。おそらく趙令時が「蝶恋花詞」を編纂した際と同じように、宴席などの談話の場では不完全な話しか語られることがなかったため、それを残念に思ったからであろう。また時折

白話的な表現や人物の対話などの描写を増やすという傾向が見られるのは、単なる記録ではなく、趙令時や洪邁と同様に、話の文学性を高め、よりわかりやすくして、多くの人々に味わってもらいたいという意図があったためではないだろうか。

#### おわりに

本稿では、文人の談論活動の状況、「談録」作品を中心とした当時の談論に関する作品の特徴、およびそれらの書物の編纂意図を考察することによって、『醉翁談録』の成書に関する問題のうち、その編纂意図について私見を述べた。

文人たちの談論活動を検討した結果、当時の宴席の場では、物語の内容が詳細に語られることはあまりなかったことが窺えた。そのため、主にある人物の言論を記録した「談録」作品や、談論のネタを提供するということを一つの目的として編纂された『類説』などの書物では、所収の話の多くが概略的である。この点は、文人の談論活動の在り方と合致すると考えられる。

しかし一方で、趙令時の「蝶恋花詞」や洪邁の『夷堅志』は、同じく談論の場で語られた話、あるいは談論のネタを提供する話を記録した作品ではあるものの、話をより完全な形にしたり、わかりやすい表現を増やすなどの工夫が施されている。そこには、いかに整って、読み応えがあり、じっくり味わってもらえるか、という、

たもので、張生という書生と崔家の娘鶯鶯との悲恋を描いた作品である。

[4] 明・徐元「八義記」(『六十種曲』第十齣「張維評話」)に「丑」張維謝不砍之恩。磕頭。朱雀橋辺野草花、烏衣巷口夕陽斜。旧時王謝堂前燕、飛入尋常百姓家。這四句說到那裏。

說到金陵建都之地、魚龍變化之邦。不說盤古共三皇、不說夏禹共陶唐、不說稼穡閩河事、單道姐已荒淫說紂王。紂王是何代。乃商湯王之後。商湯王得了六百二十九年天下、伝留三十三代、臨了一個喚做紂王。……(丑)稟老爺、沒零頭不算帳。戊午日兵臨孟津、甲子日血流漂杵、破紂王於牧野、殺姐已於宮中。詩曰、『使計謀心総是空、也須收拾話談中。紂王無道將臣斬、姐已荒淫乱紂宮。』評話已完、討賞。」とある。「八義記」に見られる講釈の話について、元代刊行の『武王伐紂書』という作品が作られている。その内容を見れば、張維が語ったものは武王伐紂の話の一部で、かなり簡単なものであったことがわかる。

[5] 『太平広記』卷四八四「雜伝記」に収められ、「李娃伝」と名付けられるこの李亜仙の話は、唐の白行簡によって作られた。長安の妓女李娃におぼれた名家の息子が、一度は落ちぶれて乞食にまでなるものの、再会した李娃に助けられて出世する物語である。

[6] 『太平広記』卷三五八「神魂」に収められ、出典は『離魂記』と記され、「王宙」と名付けられるこの話は、唐の陳玄祐によって作られたものである。地方官の娘倩娘が、病気で寝たきりの姿を父母のもとに残したまま、一方で恋人の王宙

読者に対する意識、ある種の娯楽性を追求しようという意識が窺えるように思われる。それは『醉翁談録』も同じである。編者羅燁は、語られた話を記録するという「談録」の形を用いながらも、それが広く「読まれる」ことを意識していたと考えられるのである。

『醉翁談録』は、甲集「舌耕序引」に講釈に関する記述が見られることなどから、従来、語り物の底本、あるいは話本であるという見方が展開されてきた<sup>1)</sup>。しかし前稿、あるいは本稿での考察により、少なくとも編者羅燁の意図としては、本書がそうした意図で作られたと考えることは難しそうである。しかし結果的に語り物と結びついていった可能性は排除できない。この問題については、『醉翁談録』の版式の面も考慮し、さらに考察を深めたい。

#### 注

[1] 拙稿『新編醉翁談録』の編纂意識―「談録」を手がかりとして―(『中国古典小説研究』第二二号、二〇一九年)、『新編醉翁談録』成立考―書名および編者に対する考察を中心として―(『中国中世文学研究』第七二号、二〇一九年)を参照されたい。

[2] 注1に同じ。

[3] 『太平広記』卷四八八「雜伝記」に収められ、「鶯鶯伝」と名付けられるこの話は、唐の元稹によって作られたとされ



と五年間の生活をともに過したという物語である。

[7]『尚書故実』について、南宋晁公武の『郡齋讀書志』巻十三・小説類には『尚書故実』一卷。右唐李綽編。『崇文總目』謂尚書即張延賞也。綽記延賞所談、故又題曰『尚書談録』とあり、この書は張尚書の談論を記録したものであることから、別名を『尚書談録』ともいうことがわかる。そこで本稿で『尚書故実』に言及する場合は、『尚書故実（談録）』とする。

[8] 例えば『尚書故実（談録）』に「張懷瓘『書斷』曰、『篆、籀、八分、隸書、草書、章草、飛白、行書、通謂之八体。而右軍皆在神品。右軍嘗醉書數字、点画類龍爪、後遂有龍爪書、如科斗、玉筋、偃波之類。諸家共五十二般」とある。これは、唐の張懷瓘によって編纂された『書斷』の一箇所のみである。ここから、当時張尚書は談論を行う際、全部の内容を語るのではなく、気に入った部分のみを取り上げて語ったと考えられる。

[9] 詳細については、拙稿『新編醉翁談録』の成書に関する一考察（二）——その編纂過程をめぐって——（『表現技術研究』第一五号、二〇二〇年）を参照されたい。

[10] 「五」の字は、衍字の可能性がある（『夷堅志』（中華書局、一九八一年）による）。

[11] 『塵史』は、北宋の王得臣（字は彦輔）によって編纂された、朝廷の故事などを記録する書物である。現存の版本は、南宋の慶元五（一一九五）年の刻本を底本とし、宋元の他の版本を参照して校訂した明鈔本、清の知不足齋刻本、涵芬樓

藏夏敬觀校本、四庫全書本などがある。本稿で引用した箇所は、前述の明鈔本を底本として、他本を参照した。

[12] 例えば胡士瑩『話本小說概論』（中華書局、一九八〇年）、李劍国氏『宋代志怪傳奇叙録』（南開大学出版社、一九九七年）、董上德氏「論『醉翁談録』的性質与旨趣」（『學術研究』二〇〇一年第三期）等がある。